

ナチュラル

たくさんのすばらしいワインとその造り手がいました。
そして出逢ったすばらしい人。
そこには共通の要素がありました。

〈素敵な人ほど、真に偉大なワインほど、やさしく、親切〉 〈自然である〉

ワインというものは、これが有名だ、名門だ、偉大なヴィンテージだといった尺度で手当たり次第に挑戦してみても、「なんでこんなに美味しくないのかな〜」と思ってがっかりすることがしばしばあります。

世評や金銭的な価値と中身の味わいや満足度、感動が一致しにくい飲み物です。様々な理由で質や精緻さが伴わず、飲む条件もうまく合わなければ人を感動させるものとはなりません。ワインだけでなく、料理でも、音楽でも、同様と思います。たとえ無名の造り手のワインだとしても、真にすばらしいワインは、「わあ！なんて美味しいんだろう！」というわくわくするような感動と人生の至福を与えてくれます。裸のワインの中味、そのものを虚心に見ることは容易ではないが、すばらしい出会いと経験のために大事な視点です。

銘柄、格付け、価格で人を圧せず、

〈その人柄や仕事の誠実さで人の心をゆさぶる〉

ゆっくりしみじみと伝わってくる香りと細やかな味わいや舌触りをもっています。

〈ゆるぎない芯を持っている〉

芯があってはじめてなめらかさや果実味が生きます。

〈秘めた花がある〉

花は理屈を超えた言葉に尽くせぬ魅力です。

〈かたよった味わいのものは人を疲れさせる。バランスよい様が人を安心で快適にする。〉

強すぎない。弱すぎない。薄っぺらでない。

〈極めたからこそシンプルが一番尊いことを心得ている〉

簡潔なことが一番人に受け入れられて人をたのしませると知っている。

〈何かを守ろうと戦っている〉

何かを守ろうと戦っている人は美しい。そういう人の造るワインは心をゆさぶる。

〈潔く、分け隔て無い。気風がいい。〉

いいワインの造り手ほどワインの造り方を秘密にしない。多少自分が損をしても、人のため、土地のため、稀有なものや失われつつあるものを守るために働く。そのような人の造るワインは美味しく力がある。



楡井 健一 Nirei Kenichi

1960年10月6日東京目黒生まれ。
株式会社ヤマニ 代表取締役。
若き日に大手書店に勤務する時代から、足と臭覚を稼働させた古書探索、「食」の冒険、海外や国内の旅に時を費やし、ワインの魅力にひきよせられて主としてフランスのワイン産地を訪ね歩く。最近ではアジアの熱帯雨林の旅と人、食文化に魅せられる。明治生まれの祖父楡井克司が創業した目黒の酒販業を引き継ぎ、2000年より現職。レストランや料理店、企業へのお酒に関するアドバイス、食に関する助言を行う。
趣味は、読書と目的のない街歩き、
・・・ぶらり一杯。

〈自分の足りないところ、知らないことをよく知っている〉

足りないところを認めて恥じない。知らないことは子供のように尋ねる。人の批評、文句は言わない。人まねしない。ワイン造りでは、毎年小さな失敗を認めて学び常に少しずつ進化している人のワインが、いつ飲んでも美味しいと言われる。世界の最高峰の偉大なワインは完全無欠ではない。(土地、気候、ブドウなどの)負の要素を、抑制や努力で美質に昇華しているものだ。ペトリュスは重い土を、オー・ブリオンは軽く砂利の多い土を、シャンパンは痩せた土地と寒気を、シャトーヌフ・デュ・パプは焼ける暑さの石ころだらけの畑を、…その負を、香り高さや、深みや、長命さに変えているのだ。

〈雲のように、水のように〉

型にはまらない、奔放自在、常識破りで革新的だとしても・・・こだわらず気宇壮大。行く雲、流れる水のように自然そのもので、立ち去った後もいつまでも忘れ難く記憶に残る。

〈健康で明るい〉 〈その人の存在がまわりを、世界を笑顔にしてゆく〉

いくらいいスーツを着ていても、中味が不健康では良くない。内実がうっぷんを抱えていれば、必ず表面に出てしまう。食べ物、見るもの、聴くもの、良いものをとっている人は肌と笑顔が内側から美しい。不健全なブドウや醸造設備、保存環境から来たものは、どこか風味に陰や濁りが出る。ワインも、そしてそれを入れるグラスも。よい素材の器かどうかで、入れるものの味に大いに影響する。高貴であっても、素朴さや野生味があったとしても、にごりのない素材からできているものの「明るさ」が、人を幸せにする。

この100年間は人類とワインの数千年の歴史において未だかつて無いほど技術の革新と品質の向上がみられたワインのルネッサンスの世紀でした。ワインに巨大な世界市場が広がった初めての世紀でもあります。人智と技術の限りをつくした芸術品とも宝飾品ともたとえられるワイン。巨大なマーケット商品としてのワイン。そして自然で、自由で、環境にやさしいことを目指した、天と地の恵みの飲み物としてのワイン。・・・ワインとひとくくりには言えないくらい、内容は多様なものが存在するようになりました。

宝石のように高価なワインは毎日飲めるワインではありませんが、日々に飲むワインはできうる限り上質で自然でカリ・テ・プリ（適正でお値打ち）なワインが欲しい。

そのような時代にワインを飲む私たちのための、自然で優しい味わいと香りのする「葡萄酒のための器」はないだろうか？・・・

ワインの甘さや純粋さをとりだして、手のひらでぱっと花のように見せてくれる。

こんなグラスでたのしめる、新しい時代のいきいきとしたワイン。そして懸命によき伝統を守る人の造るワインを見つけたくなりました。